

職員朝礼での校長挨拶

おはようございます。前回までで「対象に向き合う」ということを話し終えました。人間は原理的にも本性的にも対象に向き合うことができないが故に、不思議に打たれ学び続けることができる、つまり対象に向き合うことができる、このような話でした。ここから「対象に向き合う姿」というものがどんなものであるかを考えてみたいと思います。

まず分かったつもりになっている在り方は（これが人間の本性的なあり方ですが）「対象に向き合う姿」とは言えません。そうだとすれば「問いを持つ」「疑いを持つ」在り方が「対象に向き合う姿」であると言えることになります。次に「不思議に打たれて学び続ける姿」、つまり分かるから面白いというのではなく、分からないけど面白い、そういう面白さを知っているということ、これも「対象に向き合う姿」といえるでしょう。

「対象に向き合う姿」がどのようなものであるかを考える場合に、帰納的にその姿を挙げて行って考えることのほかに、「人間とは何か」といったところから演繹的に考えることも必要ではないかと思います。次回からは「他者に向き合う」ことについて考えて行きたいと思います。